

現在、足軽番所の屋根の葺き替え作業を行っています。

箱根関所の復元施設の大きな特徴の一つに栩葺（とちぶき）がありますが、屋根材の厚さが三分（9mm）以上のものを使用する場合、そのように呼びます。

箱根関所では江戸時代の史料により、杉の赤身部分を使用していたことが分かっていることから、今回の再整備でも杉板材を採用しています。

栩葺で目を引くのが、屋根板が少しずつ重ねられて織りなす美しい段々の形状です。横から見ると板材がきちんと揃えられ、真っ直ぐに並んだ板がいくつも重なって見えるさまは壮観です。

外から見ると横にズラッと揃っているのですが、あたかも横長の板が使われているように見えますが、実際には板一枚の大きさは、幅 約 15 cm・長さ 約 45 cmのものが使用され、少しずつ、ずらしながら腐食に強い竹釘で打ち付けています。

このため、一坪（1.8m×1.8m）で使用される屋根材は 360 枚ほどになります。

屋根板には割り板を使用しています。板は木材の繊維にそって割っているため、大変強い材料です。

また、凍害や腐食に対して強いため、降雨や高湿、降雪など箱根の厳しい自然環境に適応した屋根となっています。

この技法は、日本で古くから伝わる伝統建築技法の一つで、その技術を持っている事業者は国内で二十数社しか存在しませんし、若い担い手も少なくなってきました。

日本には、豊かな文化を支える様々な伝統技術があり、それらの継承が求められており、箱根関所のこの再整備も将来に繋げる役割（技術の継承）を担っています。

箱根関所での、この葺き替え作業は恐らく 20 年以上先になります。滅多に見ることのできない大工さんの作業を間近でご覧ください。



【参考】 この写真の葺き方は、屋根材の厚さが 1 分(3 mm)のため、柿葺(こけらぶき)と呼ばれます。